

KSTNET WEB版 2005年8月号

1. 会長からのメッセージ

熊本県言語聴覚士会会長 小藪真知子

第6回日本言語聴覚士協会総会および地域職能組織代表者会議報告

日本言語聴覚士協会新会長決定『佐賀県：深浦順一先生』

6月11日、12日に埼玉県大宮市での学術集会に先立ち、前日に全国37の言語聴覚士会の代者会議に出席しました。6月現在で全国組織協議会に加入しているのは13団体ですが、未加入のほとんどの県が全国会入会希望を表明されました。各県とも年々増加する言語聴覚士の新人教育をどうするか、地域での広報活動などの問題点を話し合いました。

日本言語聴覚士総会では、会の創設時から言語聴覚士をリードしてこられた藤田郁代前会長が任期満了に伴い退任され、新会長に佐賀県言語聴覚士会会長の深浦順一先生が選任されました。深浦先生は九州地区の言語聴覚士のリーダー役でもあり、非常に気さくで誠実な先生で会長に適任の人材です。今後の言語聴覚士協会の舵取りの大役をお願いするばかりでなく、我々九州の言語聴覚士一人ひとりが新体制を支えていく努力をしましょう。

学会は毎年参加者数が増加しており、両日の参加者は1850名で、初日の朝早くから会場の受付ロビーは人の波で目標の場所を探すのが難しいほどでした。日頃は、少数で臨床に立ち向かう感の強い私たちの業務ですが、こんなにもたくさんの仲間がいるんだということは、学会に参加してみて始めて実感できるのではないかと思います。本年の学会ではこれまで以上に熊本県から多くの演題が出され、初めて全国学会で発表する方々の緊張感と若々しい情熱を感じました。来◆年の学会は石川県金沢市で『地域における言語聴覚療法』のテーマで開催されます。会長の勝木準先生から、ぜひ熊本からも沢山ご参加下さいとのお言葉をいただいています。

また、日本言語聴覚士協会は、学会参加や講習会参加をポイントとして学会認定制度を設けていますが、本年度中には認定条件を満たす会員が出て申請中とのことでした。

県士会会員の70%以上が全国学会入会するという条件を満たすと、熊本県言語聴覚士会も全国協議会に参加を認められます。メリットとして当県主催の研修会、ブロック勉強会、県内の勉強会も全国協会の認定を受けられ、中央から講師を呼ぶ時も補助が得られます。熊本県言語聴覚士会の入会率は、7月末で62%、認定までもう一息です。全国協会の研修制度は今後ますます充実した計画が立てられています。我々の資質向上のために未入会の方には声をかけ、8月中に入会率70%を達成しましょう。

第4回九州地区合同学術集会まであと3ヶ月

11月12日（土）熊本産業文化会館大ホールで開催へ向け準備中です。昨年の2倍以上の演題申込みがあり、本県からも多くの演題が出て心強く思っています。この分では当日の参加者もこれまでを大きく上回るのではないかと予想しております。当県で開催する初めての大きな学術集会です。県外のSTに、来てよかったと言っただけのような実りのある学会を目指して万全の準備をしたいと思っております。現在学術研修部を中心に準備しておりますが、当日は会

員すべての力を合わせて成功させましょう。

熊本県言語聴覚士会
正会員数171名（8月1日現在）

日本言語聴覚士協会承認必要人数 $171 \times 0.7 = 120$ 名

日本言語聴覚士協会加入者数**106名**

$120 - 106 = 14$ 名

あと14名加入で70%達成

- ①8月中に14名の方が入会すると、熊本県言語聴覚士会として9月の理事会へ全国協議会参加を申請します。
- ②申請が受理されて3ヵ月後の県内勉強会から、全国協会のポイント制度および研究会支援制度が利用できます。
- ③協会入会者はすべて賠償責任保険制度が利用できます。

2.平成17年度 第2回理事会議事録

開催日：平成17年7月1日（金） 19:00～ 場所：熊本託麻台病院 会議室

出席者：小藺 三浦 中村 城野 山田 山口 下田 宮本 兼田 奥谷 花生 前田

議題1 各ブロック活動報告

- ・ 東部ブロック：症例発表、施設見学（熊本セントラル病院）
- ・ 北部ブロック：症例報告⇒個人情報保護法によって資料の持ち出しができないなどの影響があった。
- ・ 西部ブロック：k-s-t-netのとおり、7月にも症例検討会開催予定。
- ・ 中部ブロック：5月20日に全体会開催（新人向けに熊本のリハについて、介護保険改正の情報提供）

議題2 健康フェスティバル(10月8、9日開催)の進捗状況について（宮本）

<実施予定の内容>

- ・ 聴力検査、相談
- ・ 脳力チェック（少し内容を変えて）
- ・ 嚥下食の試食 ⇒ 衛生面でどうか？在宅コーナーとの兼ね合いは？医師会と相談していく

- ・ 書籍の展示

＜場所＞ くまもと県民交流館パレア ・ P Tと同じブースで6コマ（1コマ
→180cm×180cm）

＜必要スタッフ人数＞ 60名程度

⇒ 1日ずつ入ってもらえば30人で済むのでは？

今回は北部ブロック中心に（次年度は東部）

基本的には中・北・東でまわしていく（西・南にはお手伝いを呼びかける）

議題3 九州地区合◆同学術集会(11月12日開催)について

役割・詳細については学術研修部と理事との合同会議を開催

日時： 8月6日（土）15：00～

場所： 西日本病院

＜理事会での決定事項＞

広告関係（渉外統括） ⇒ 中村

受付統括 ⇒ 三浦

演題座長 ⇒ 山田他 演題座長は中堅STに・・・

全体の進行・運営役が必要 ⇒ 学術部員で

その他

九州地区ST会長が佐賀の深浦先生になった。

熊本の全国言語聴覚士会入会率 現在50%程度である。研修会等で入会の斡旋を継続していく。

事務局の会員名簿のデーターを理事会ブリーフケースにアップしていく。

＜次回理事会開催予定＞

平成17年10月7日（金） 19:00～ 熊本託麻台病院 情報管理棟 1階会議室

以上

書記：前田紗知

3. 熊本県言語聴覚士会 第1回 学術研修会ステップアップ講座について

学術研修部

平成17年7月3日（日）に第1回学術研修会ステップアップ講座が、江南病院にて行われました。出席者は、約50名で、以下のような内容で行われました。

1. 「熊本市の新療養システム」 熊本市健康福祉局保健福祉部

障害保健福祉課 課長補佐 米澤 誠司

(1) ネットワーク型療育システム実現に向けた取り組み

療育ネットワークの構築・子供発達支援センターの整備・施設などが役割を担う機能の強化

(2) こども発達支援センター（仮称）の概要

(3) 疾患・障害療育体制の現状

2. 「熊本における小児言語訓練受け入れの現状」

江南病院 下田 祐輝

- (1)STが小児言語訓練を行うことの必要性
- (2)熊本STの小児言語訓練に対する「思い」と「思いこみ」
- (3)くまもとST・こどもサポートNETについて
- (4)現在熊本県内で小児言語訓練を行っている施設の話
- (5)今後の課題

3. 「熊本県言語聴覚士会 学術研修部の企画に対する要望及び演題発表の意識調査」に関する報告

香椎原病院 横山 典子

4. 「言語聴覚士の雑務」

菊南病院 宮本 恵美

- (1)言語聴覚療法の診療報酬について
 - ・施設基準
 - ・個別訓練と集団訓練
 - ・早期加算
 - ・訪問リハビリテーション
 - ・摂食機能療法
- (2)報告書の書き方
 - ・初期報告書及び経過報告書の書き方 (失語・構音障害・嚥下障害)
 - ・他施設への申し送り書の書き方 (失語・構音障害・嚥下障害)

5. 「高次脳機能障害をめぐる諸問題点」 言語聴覚士会

会長 小園 真知子

- (1)熊本県における高次脳機能障害への対応
 - ・熊本県高次脳機能障害検討委員会2004年設置
 - ・具体的方策の検討
 - ・「高次脳機能障害」対策モデル事業
- (2)高次脳機能障害の定義
 - ・医学的定義及び行政的定義
- (3)診断基準
 - ・主要症状
 - ・検査所見
 - ・除外項目
 - ・高次脳機能障害の具体的症状
 - ・社会的行動傷害
- (4)認知リハビリテーション
- (5)注意障害のリハビリテーション
- (6)認知症の定義及び評価
- (7)STとして今後どのようにかかわっていく必要があるか

※「言語聴覚士の雑務」の際、ご質問いただいた訪問リハについて、ご返答させていただきたいと思います。(菊南病院 宮本)

訪問リハについて



訪問リハの回数は、1日の18単位に含まれます。また、1日訪問に行くとした場合は、行き帰りの時間や訓練時間を考慮すると、5人くらいが限度ではないだろうかとのことでした。

4.各ブロック報告

[東部ブロック]

「東部ブロック第1回勉強会報告」

去る6月24日（金）に、熊本セントラル病院のリハビリテーション室を会場にして勉強会を開催しました。内容は熊本リハビリテーション病院の松本優子先生による「左被殻出血による失語症」と、熊本セントラル病院の坂本真生先生による「喉頭蓋の倒れこみにより呼吸障害を呈した症例」でした。

症例の経過や訓練方法などの質疑とともに、施設見学も行い、お互いの情報交換の場になったと思います。今回参加者24名と、お忙しい中たくさんの方が集まってくださいました。今後も活気ある勉強会にしていけるよう、ご協力をお願いします。

次回は9月に開催予定です。詳細が決まりましたらお知らせいたします。奮ってご参加ください。

文責:兼田洋美

[西部ブロック]

去る7月29日、メディカルカレッジ青照館において2005年度第2回研究会を行いました。発表者は済生会みすみ病院の宮崎祐子先生、演題は『顕著な発話障害を呈した急性期脳梗塞の2症例』出席者は8名でした。比較的珍しい純粹発語失行について貴重な情報と考察が得られ、有意義な会でした。次回は9月中に、8月6日（土）に長崎市◆で行われる摂食・嚥下フォーラムの復講を、楽洋の里の池田聖司先生に行っていただきます。8月6日に都合がつかず聞けない方、他ブロックの方も遠慮なくおいでください。

文責 山口 信

[南部ブロック]

★第7回南部ブロック勉強会報告★

- ・日時：8月6日（土）3時～5時
- ・場所：熊本労災病院
- ・担当：名和小児クリニック 伊藤先生

今回の勉強会では「八代地域における健診や小児療育の流れとSTのニーズや関わりについて」の発表がありました。

内容は、1) 八代市の乳幼児健診とその後のフォローアップ体制について、2) STの関わり、3) 主なニーズ、4) 今後考えていくこと、についてでした。

南部地域では、小児のニーズに対してSTが少なく受け皿が少ないというのが現状で、小児に関わるSTの必要性を痛感致しました。

※第8回の勉強会は11月に「にしくまもと病院」にて行う予定です。内容は鋭意検討中です。

他のブロックの方のお運びも心よりお待ちしております。

< (。；) >

文責：おくたに けんじろう（くまもとおんじゃく病院）

[北部ブロック]

平成17年6月18日（土）有明成仁病院にて第1回北部ブロック会を開催しました。内容は(田)施設紹介 (月)症例検討会「発症より7週間程度で当院に来院されたブローカ失語を呈した症例の1年間の訓練と経過」について検討をしました。(田)施設紹介では当院の患者の現状を述べ、小児がS T患者の75%を占めており、Needsが高いことをお話しました。(月)症例検討会では他院の先生方がされている訓練の方法や、失語症のタイプ分類の考え方について意見をいただきました。その他にも日ごろの訓練で分からないことや訓練の方法について話すことができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。

次回：平成17年9月24日 14:00～ 菊南病院にて

文責：山田真由美

[中部ブロック]

<平成17年度 第1回中部ブロック会> 平成17年5月20日 熊本託麻台病院

5月28日(水)、熊本託麻台病院にて、平成17年度 第1回中部ブロック会が行われました。研修生、実習生を含め18名の方が集まり、熊本のリハビリテーションについてQ&A方式で行われました。

熊本の地域の特徴や現在の診療体系、今後の見通し・対策など新人S Tや研修・実習生にとっては学校では学びにくいのが知っておくべき必要なことでもあり、熱心にメモをとる様子が見られました。その他の質問に対しても、若手、ベテランそれぞれの意見が交わされました。やはり、18名ものS T及び研修・実習生が集まると様々な情報が聞かれ、有意義な会になりました。

文責 熊本託麻台病院 内野裕介

次回の中部ブロック会は平成17年9月熊本託麻台病院にて第2回中部ブロック会を開催いたします。

中部ブロック長 下田 祐輝

5.体験談

[ステップアップ講座に参加して]

(医療法人)緑幸会 にしくまもと病院 言語聴覚士 鎌崎 佑佳

去る7月3日、私は江南病院で開催された「ステップアップ講座」に参加し、5名の先生方の話を聞く機会を得ました。

その内容は高次脳機能障害をめぐる諸問題や熊本における小児言語訓練受け入れの現状など、普段の業務の中ではなかなか聞くことが出来ない、非常に興味深いものでした。高次脳機能障害に関しては未解明な部分が多いのですが、一方、日々業務の中では何らかの高次脳的な問題をもつ患者が多いように感じます。また、そうした中私たちSTはその患者さん達に関わり、支援の手をさしのべる必要性があるにもかかわらず、現状では何らかの言語病理学的診断名をつけないと診療報酬が請求できないということを知りました。

さらに、小児の領域での最大の問題点は対象者の受け皿が少ないということだそうです。現在小児の言語聴覚療法を受け入れていない施設も積極的に参加してほしいと思うと同時に、私の病院でも、子供たちの生活を支えていくためにも、子供たちに関わっていきたいと感じました。

また、今回の勉強会ではSTの仕事をやっていく中で点数のとり方、報告書の書き方などいわばSTの裏方としての業務について勉強することができ、新人の私たちにとってはすごく勉強になりました。STとして仕事をするためには患者様を目の前にして評価・訓練を行うのはもちろんですが、その前後の事務的な業務も大切な仕事の一つなので今回の勉強会ではその点についてもとてもわかりやすくまとめ◆てあってよかったと思います。また仕事をやりながら事務的な業務で疑問に思っていたことや不安だったことが少し解決できたような気がします。

言語聴覚士という国家資格が誕生して7年が経過した今、今回の勉強会を通して感じたことは、社会のため、またSTの社会的地位向上のため、さまざまな意味でSTの転機を迎えつつあるのではないかということです。高次脳機能障害をSTの対象として訓練できるように、また、現在よりも多くの小児にSTの手が届くようにすること。これらはいずれも今後STという職業が生き残っていくために必要なことの一つであり、そうしたことを知ることが出来たという面でも、今回の勉強会は有益なものになったのではないのでしょうか。

[体験記 ～日本言語聴覚学会に参加して～]

6月11日12日に埼玉県で行われた学会に、今回初めて発表という形で参加しました。この2日間で約1800人が参加していたそうです。

そんな人数がいるとは頭になく、初めての大きな会場で心臓が飛び出るくらい緊張していました。そんな中熊本の先生方に助けられ、発表を終えることができました。

質問やご指摘を受けることで、自分の弱点をみつけられたと思います。また、他の発表や講演を聴くことで、もっともっと頑張らなくては・頑張りたいという気持ちにさせられ、自分にとっていい刺激になったと感じています。2日間でしたが、頭や心が1つずつでは足りないくらい、いい経験をさせてもらったと思っています。

3年目で知識や技術はまだまだですが、今回の気持ちを患者様と触れ合う中で生かしていきたいと思っています。自分の飛躍のためにも、機会があればまた挑戦したいと思います。

熊本回生会病院 鋤田貴子

6.書籍・HP紹介

[自閉症児者を家族に持つ医師・歯科医師によるHP]のお知らせ

2002年の初め、自閉症児の父である医師3人が集まったのがきっかけで、会員はいま、100名を越え、HP <http://homepage3.nifty.com/afd/>を立ち上げるまでになりました。

以下は、事務局長で脳外科医、大屋滋さんからのお便りです。

「他の親の会以上に“普通の悩める親”の集まりです。ただ、脳神経とか医療に関する共通理解のベースがあるので、いきなり医学的に専門的な話になっても全員がついてきて、論議がかみ合うという利点があります。

また、医師・歯科医師であるが故に、単なる親側（支援される側、ある意味では被害者側）のみならず、医療者側（支援者側、一つまちがえると加害者側）の立場にもなりうる。そのような状況の中で、自分たちの子ども、さらには障害のある人全般に役に立つ活動を少しでも始めたいという気持ちが湧いてきた。その形として、ホームページが出来ました。まだまだ駆け出しですが、情報を着実に蓄積していきたいと思っております」

文責 事務局長 脳外科医 大屋 滋 氏 こどもの発達支援を考える会 MLより転載
[LCスケール]

Language Communication Developmental Scale

言語・コミュニケーション発達スケール

大伴潔 林安紀子 橋本創一 ほか
山海堂 4700円

全国の0歳から6歳までの健常乳幼児660人を対象に標準化が行われました。

特徴は

(日)乳幼児期から学齢前の言語・コミュニケーションレベルの発達を評価します

(月)ことばの領域を限定せず、総合的なことばの発達を評価

(火)一つの課題について、複数の通過基準を設定

(水)自然な文脈を設定し、課題への自発性を高める工夫

(木)言語・コミュニケーションの発達年齢と発達指数を求めることができる

などです。

~~~~~

検査道具にはコップとかクマのぬいぐるみとか鈴とかスプーンなどが必要です。自分たちでもそろえられますが、検査道具もそろったセットは7350円+送料で販売されています。

セット：検査法マニュアル・検査用図版・記録用紙・道具

セットの申し込み先



知的障害者更生施設 青葉メゾン インターネット事業部

FAX 045-962-9847 メール maison@yss-net.or.jp

(日)購入者氏名 (月)注文数 (火)お届け先住所・電話番号(水)配達希望時間帯  
を記入の上申し込んでください。

~~~~~

[「わかってほしい！気になる子 自閉症・ADHDなどと向き合う保育」]

田中康雄 監修 学研 ラポムブックス 16年10月発行

1600円+税金

特別支援教育がらみで、学校にいる軽度発達障害の子どもたちをどう支援するかという本は、山のように出て

いますが、幼児期のかかわりについて、これは！と思える本は、あまりないように思っていました。

この本は、保育園幼稚園で日々「ちょっと気になる」子たち、つまり早い時期から適切な支援が必要な子どもたちについて、どう理解しどうかかわればいいのかを本当に細かく、分かりやすく書いてあります。

どう対応したらいいか、という視点ではなく「どういうふうにサポートしてもらおうことが、その子にとって幸せな未来を約束するのか」という立場から書かれていて、読んでいる私自身が癒される感じを受けました。「私だって、こういうふうに理解されこういうふうに扱ってもらいたいな」って。

精神科のドクターは、患者さんを自殺から救ってあげられない無力感をたびたび経験するといいます。うつやリストカット、自殺ばかりではなく、引きこもりや拒食、被虐待症候群、家庭内暴力、反社会行動など、たくさんの子どもたちのSOSに付き合いそして、たくさんの無力さも痛感してきた精神科の先生ならではの本だと思いました。

だからこそ、今生きている子どもたちには幸せになってもらいたい！！と、思っておられるのだろうか、と。

内容については下記をどうぞ。

http://www.e-hon.ne.jp/bec/SA/Detail?refShinCode=0100000000000031447120&Action_id=121&Sza_id=A0

昨年10月発行の本がすでに三刷です。いかに求められていた本であるかがわかります。

